

レクチャー・イベント「闇市から見た東京—新宿を中心として」

<概要>

建築と社会をむすび、さまざまなジャンルをクロスオーバーさせる試みを続けるネットワーク「SHA-ken（シャケン）」では、3月の展覧会「建築家の色とかたち」に続くイベントとして都市を捉えるレクチャーを企画。第一弾として、文学的視座から「闇市」をテーマに東京を読み直します。どなたでもご自由に参加され、またご発言していただけたら幸いです。

<日時> 5月14日（金）19時～ 入場無料

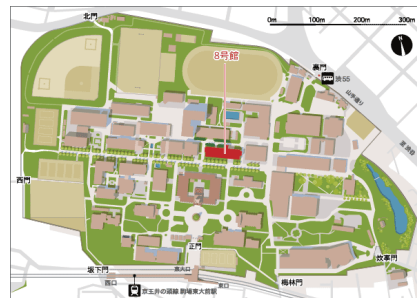
<会場> 東大駒場キャンパス8号館3階315号教室

[アクセス] 京王井の頭線 駒場東大前駅から徒歩5分

<発案者> 逆井聡人 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程

<企画主宰> [SHA-ken] www.sha-ken.org

SHA-ken（シャケン）とは社会に開いた建築を考える団体。建築家や建築を学ぶ学生だけでなく、建築に関心をもつ一般の人々が語りあい、新しい建築の機会をつくることを目指す。アートや多ジャンルの領域とクロスオーバーし、地域や社会との連動をも視野に入れた、社会起業として建築を捉える。



<企画趣旨>

大規模な空襲で一面焼け野原となった東京。その焦土と化した地上に雨後の筍のように生まれた闇市は、敗戦直後の世相を代表するものとして扱われてきた。昭和二十五年までにはおおかた撤去されてしまった闇市であるが、実は現在の東京のそこかしこにその痕跡を見ることができる。最大の闇市の一つがあり、闇市の始まりの地ともいえる新宿は、その最たる例である。

闇市とは何だったのか、その問いを念頭に置きながら新宿を、そして東京を再考する。

そもそも闇市の「闇」は辞書的な意味で言うと「闇取引」のことを指す。しかし「闇取引」は何も敗戦後に限って存在したというわけではない。闇市が敗戦直後という状況の象徴的なものとして捉えられるのは、その「闇」の字義的な意味以上に、「市」という実際の場やそこに並べられた様々な物資や闊歩する人々、それにまつわる多くの言説、そしてそれら全てを包含する物理的な「空間」という意味合いもある。

闇市とはどんな空間か。なぜそれが必要とされ、どんな想いに充ち満ちていたのか。闇市という空間の上に作られた「戦後」という時代。人々は現在もその時代に生きている。「戦後」の下にあったはずの闇市を求め、彷徨う内に、新宿と呼ばれる街が、あるいは東京という都市が時空間を跨ぐ複数の意味の層を保持していることに気づかされる。

この発表では地図や写真、映像を用いて敗戦直後の闇市を覗いてみる。足がかりは、敗戦から三日後に「光は新宿から」という新聞広告で始まった「新宿マーケット」。そこを視座に設定したとき、どんな東京が見えてくるのか。参加される方々と一緒に話し合っていきたい。（文：逆井聡人）



画像出典／松平誠『ヤミ市 幻のガイドブック』（ちくま新書、1995年、19頁、写真提供は朝日新聞社）

■逆井聡人

さかさい あきと。東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程。専門は近・現代日本文学および日本映画史。特に敗戦直後の文学・映画作品を主に研究している。

<本イベントについてのお問い合わせ先>

有限会社ブライズヘッド（担当 高橋）

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町524 高橋ビル201

TEL / 03-5287-5358 FAX / 03-5287-5387

<http://www.brizhead.jp>

masa@brizhead.jp もしくは info@sha-ken.org